

教育心理学教室教官の研究状況報告

研究経過報告——'84年秋～'85年夏——

小 嶋 秀 夫

'85年3月下旬から2か月間、文部省の在外研究員（短期）として、アメリカ・カナダに行く機会が与えられた。Michael Lewis のいる New Jersey 医科歯科大学・Rutgers Medical School (New Brunswick) を本拠にして研究を進めるとともに、パーデュー大学、コーネル大学、ハーヴァード大学、トロントを初めとする多くの場所を訪れ、目的としていた活動ができたことは幸いであった。研究発表・講演・コロキウムなどの形で、あちこちで延べ8回話す機会があり、種々の討論を進めることができた。また、各地でおよそ20名の研究者（心理学・社会学・歴史学・文化人類学・教育学・法学など）に会い討論することもできた。さらに、4つの大学の研究者と6つのテーマで共同研究を進めていく打ち合わせをした。そのほか、各地の図書館・博物館・美術館・歴史協会・医師会館で、育児書・育児器具・人生段階図・子どもと子育ての歴史に関する文献などに関する研究資料収集にあたった。

これらの研究・活動の成果が現れるのは、早いもので来年、普通は数年後のことであり、そして中にはついに現れずじまいのものも出るであろう。その後、新たに訪れる必要のあることがわかったところも多く出てきているので、課題は増える一方である。しかし、いずれにしても、後の肥やしとなりうる経験をする機会が与えられたことに感謝している。

子どもの発達に関心をもつ歴史家と歴史に興味をもつ発達研究者との共同作業が Society for Research in Child Development (SRCD) の提唱により始まって2年を越えた。我が国の発達研究者で子どもの生活と発達の歴史に興味をもつ人は数少なく、インフォーマルな形ででも歴史家と研究グループを組織しようとする試みはまだないであろう。それは私にとっても一つの課題となっている。

その後、7月の下旬にオーストラリアのある財団に招かれ、「未来の子ども：その健康と教育」という会議（ブリスベン）に参加した。東洋からのスピーカーは私一人であり、基調講演やシンポジウム、セミナー、パネル・ディスカッション、ディスカッション・セッション

などでたいへん忙しかったが、たんなる学問上の成果を越えた何かを学んだような気がする。

'84年秋に来日した Michael Lewis を迎え、教室を中心にして名古屋発達セミナー'84と講演会を開き、また研究討論の機会を何回かもった。この種の試みの蓄積が、我々の研究を世界の広場に出していくきっかけとなることを願っている。

〔児童発達観の研究〕 教育心理学年報第24集に載ったレビュー論文：展望 児童発達観の研究（'85年春）は、この領域の研究を分類するために筆者が考案した枠組みを使って過去の研究を評価し、研究上の問題を探ったものである。その論文の末尾で言及しておいた Irving Sigel（編）の本（Parental belief systems）は、私が今回アメリカ入りする直前に現れ、彼とも2回かなり突っ込んだ話をする事ができた。この本の出現により、筆者の枠組みを変える必要は生じなかった。しかし、予想以上に多様な研究が進められていること、そして、それにもかかわらず、今後の研究の発展のために、解決しなければならぬ問題がいくつかあることが確認できた。児童発達観の研究はトロントの SRCD の集会でも明らかのように、いま比較文化的研究への機運が高まってきており、私もその情報ネットワークに加入した。そこに当然、情報を送り込まなければならない。

前年度のこの欄で触れた「柏崎日記」は、その後間もなく、澤下春男・能親両氏の3年半の努力により、「桑名日記」とともに、完全に活字化して現れた。四日市市の教育委員会の好意でそれを知り、さらに後になって原物まで届けてもらった私はしばらく呆然とした。「自筆本を読むという、いつなし遂げられるかわからない目標のために私が始めた勉強は、直接の役には立たなくなった。」という落胆の他に、文学部の山下宏明教授に無駄をさせてしまって申し訳ないという気持ち、さらにはほっとした解放感などが交錯した。その内容分析を急ぐだけである。

同じく前年度に触れた「十界図」は、その一つが津市にあることがわかり（そのことを電話で話された萩原龍夫氏は今年亡くなった）、何人もの方の協力をえて、昨年10月に原物を見、撮影することができた。その写真は

トロントでの SRCD での発表「児童発達についての日本の概念」の中にも織り込んだ。それを基にした論文が来年に International Journal of Behavioral Development に現れると思う。また、「人生の時期」についての概念を研究する教育心理学的・発達心理学的意味については、梅本堯夫（編）の本（新曜社、1985）の中でも少し触れた。

〔家族関係の研究〕 きょうだい関係の形成過程に関する短期縦断研究は、河合優年・山田洋子・村上京子との

共同研究であり、親一幼児一乳児52組の協力をえて行われた。データ収集と一次的な分析を終わり、それについては科学研究費補助金の報告書にまとめてあり、一部は、日本教育心理学会第27回総会（'85年9月、東京）でも発表するが、本格的な分析を今後進めていく。なお、きょうだい関係の領域でも比較文化的研究の関心が深く、情報ネットワークが形成されつつある。その他は前年度に述べたことの継続であるので省略する。

(1985年8月1日)

この1年の歩み（昭和59年から昭和60年にかけて）

村上英治

1) 附属中学、高等学校校長の任期を今年3月無事終えることができた。青春まっただ中、いきいきと今を謳歌する中学生、高校生の諸君と出合い、かかわりを深めることのできたのは、私にとって何ものにもかえがたい貴重な体験であった。時しも今年国際青年年、明日の時代をめざし、広く世界に目を向けて、大きく羽ばたこうとする若い諸君に期待するところ大きい。この3年間、忘れることのできない思い出に満たされているが、特に最後の1年では、南棟とよぶことになった新館落成の喜びと、帰国子女受け入れをも含めての入試方法を摸索しての悩みなど、また心に残るもの少なくない。管理教育の声かまびすしい中、おおらかなのびのびとした附属学校の伝統を、いつまでも守りつづけてほしいと、改めて今心から思う。

2) この4月、かねがね概算要求で要望してきた「心理教育相談室」が文部省から認められ、学部附属施設として出発することとなり、従来の「臨床心理相談室」の名称が改められて、相談活動に対する料金を徴収し、国庫に納入する運びに到った。京都大学、九州大学、広島大学、東京大学に次いで全国五番目の施設としての発足は、心理臨床活動が文字どおり市民権を得ることになった証左としても、画期的なことである。当然これらの施設を運営するにあたっての、私どもスタッフの責務は一層大きくなると自戒しなければならないが、それと共に、この相談室で心理臨床家をめざして研鑽重ねる若い人たちへの養成のありかたも、今まで以上に形式・内容ともに整備されなければならないようになってくる。「心理臨床入門講義」は昨年度から学部カリキュラムの中に正式に認められてきているが、この4月から新しく蔭山助教授を迎え入れて、いよいよその充実につとめるとともに、病

院臨床に志す院生・研究生のためにも、従来私的に依頼してきた病院臨床実習コースを、正規のものとして体系づける努力を加えている。

立場を同じくする五大学の心理臨床系大学院生相互研修の場として、これまた従来も一部で行われていた、大学院生の側で企画される合宿形式での症例検討会が、今年は京都大学で7月下旬開催されたのに、スタッフ全員参加したのも、何よりもこうした臨床のウデを相互に切磋琢磨しあう必要性を痛感するからにはかならない。

3) こうした趨勢の中で、心理臨床家の資格認定の問題は緊急の課題となってきている。昨年11月広島大学で開催された日本心理臨床学会第3回大会で、学会企画シンポジウムとして、資格認定と教育研修の問題が活発に論議されたのをふまえ、日本心理臨床学会理事会では今年に入ってから、関係省庁との交渉をもすすめるかたわら、独自に特別委員会を構成し、資格認定に向けてかなり積極的な活動をふみ出そうとしているのも、こうした方向性に即してのことである。

ただ改めていうまでもなく、心理臨床の実践はこのような資格が外的規準として制定されさえすれば、それだけで有効に潤滑に機能していくものではない。心理臨床家として基本的な姿勢・態度が、何よりも内的枠組として要請されるのである。

「心理臨床学研究」第2巻第2号（60年3月刊）の巻頭言としてに寄稿を求められ、「心理臨床家のこころ」と題して、3つの問いかけを提起したのは、まさしくこの意味においてである。そしてそれはまた、単に他者に要請するところであるのみならず、臨床30年、私自身、自己に対しての厳しい警鐘の声たらしめたいと考えている。